

楕円体座標を用いた計算 注1

テキスト p.134~135 の積分について述べる．例えば，(10.35) 式の S は，

$$S = \langle \phi_A(1) | \phi_B(1) \rangle = \int \frac{1}{\pi} e^{-(r_{A1} + r_{B1})} dr_1 \quad (1)$$

となる．このような積分は，楕円体座標というものをを用いて行う．

図 1 に，ある XY 平面上に描かれた，2 つの焦点 $F(a, 0), F'(-a, 0)$ をもつ楕円および双曲線を示す．この図から分かるように， XY 平面上の任意の点は，楕円と双曲線の交点で表すことができ，さらに X 軸方向に回転させれば，3 次元空間の任意の点を表すことができる．

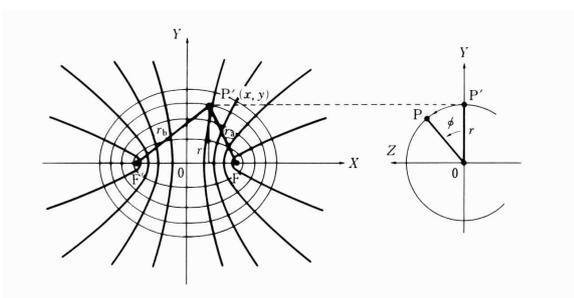


図 1: 楕円体座標

楕円と双曲線の方程式は a_1, b_1, a_2, b_2 を定数として，

$$\frac{x^2}{a_1^2} + \frac{y^2}{b_1^2} = 1 \quad (\text{楕円}) \quad (2)$$

$$\frac{x^2}{a_2^2} - \frac{y^2}{b_2^2} = 1 \quad (\text{双曲線}) \quad (3)$$

となる．また，焦点の座標 a の値は，

$$a = \sqrt{a_1^2 - b_1^2} \quad (\text{楕円}) \quad (4)$$

$$a = \sqrt{a_2^2 + b_2^2} \quad (\text{双曲線}) \quad (5)$$

さらに，楕円および双曲線の離心率をそれぞれ e_1, e_2 とすると，

$$a = a_1 e_1 = a_2 e_2 \quad (6)$$

である．これらの関係を示したのが，図 2 である．また，楕円の定義から，焦点 F, F' と点 P' において

$$|F\bar{P}' + P'\bar{F}'| = r_a + r_b = 2a_1 = 2a/e_1 \quad (7)$$

注1 大岩正芳著、「初等量子化学」(化学同人) から抜粋，改変

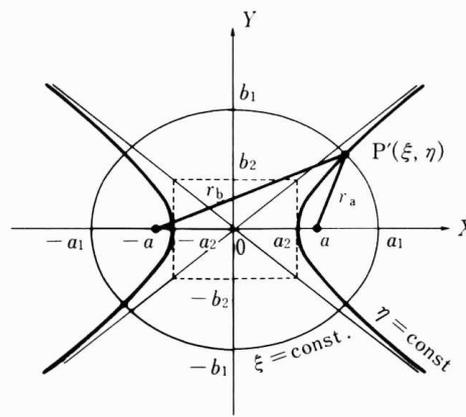


図 2: 楕円と双曲線の定数の関係

となり，同様に双曲線の定義から

$$|\bar{F}P' - P'\bar{F}'| = r_a - r_b = 2a_2 = 2a/e_2 \quad (8)$$

となることに注意する．

ここで，次の 2 つの座標 ξ と η を導入する．

$$\xi = \frac{r_a + r_b}{2a} = 1/e_1 \quad (9)$$

$$\eta = \frac{r_a - r_b}{2a} = \pm 1/e_2 \quad (10)$$

図 1 において，任意の点 $P'(x, y)$ について r_a および r_b が x, y で表すことができるので， ξ, η も x, y で表すことができる．すなわち

$$a_1 = a/e_1 = a\xi, \quad b_1^2 = a_1^2 - a^2 = a^2(\xi^2 - 1) \quad (11)$$

$$a_2 = a/e_2 = a\eta, \quad b_2^2 = a^2 - a_2^2 = a^2(1 - \eta^2) \quad (12)$$

となるので，

$$\frac{x^2}{a^2\xi^2} + \frac{y^2}{a^2(\xi^2 - 1)} = 1 \quad (13)$$

$$\frac{x^2}{a^2\eta^2} - \frac{y^2}{a^2(1 - \eta^2)} = 1 \quad (14)$$

となるから，この連立方程式を解いて

$$x = \pm a\xi\eta \quad (15)$$

$$y = \pm a\sqrt{(\xi^2 - 1)(1 - \eta^2)} \quad (16)$$

となる．

さらに 3 次元空間の座標を表すことを考えると，図 1 にあるように， X 軸のまわりに Y 軸を回転させて，点 P に一致させる．すなわち，上の y 座標を X 軸からの距離 r とし，回転角を ϕ とおくと，

$$r = \pm a\sqrt{(\xi^2 - 1)(1 - \eta^2)} \quad (17)$$

$$y = r \cos \phi, \quad z = r \sin \phi \quad (18)$$

とおくことができる。したがって、3次元空間の任意の点は、 ξ, η, ϕ で表すことができる。それぞれの取りうる値の範囲は $1 \leq \xi < \infty, -1 \leq \eta \leq 1, 0 \leq \phi \leq 2\pi$ である。

次に積分を行う際に、体積素片 $d\vec{r} = dxdydz$ を ξ, η, ϕ で表さねばならないが、Jacobian を求めることにより、

$$dxdydz = a^3(\xi^2 - \eta^2)d\xi d\eta d\phi \quad (19)$$

となる(各自で確かめよ)。

さて、この楕円体座標を用いれば、テキストの積分を計算することができる。まず(10.35)の重なり積分 S は、 $\xi = (r_{A_1} + r_{B_1})/R, \eta = (r_{A_1} - r_{B_1})/R$ ($R=2a$) とおけば、

$$\begin{aligned} S &= \int \frac{1}{\pi} e^{-(r_{A_1} + r_{B_1})} d\vec{r}_1 \\ &= \int \frac{1}{\pi} e^{-R\xi} \frac{R^3}{8} (\xi^2 - \eta^2) d\xi d\eta d\phi \\ &= \frac{R^3}{4} \int_1^\infty \int_{-1}^1 e^{-R\xi} (\xi^2 - \eta^2) d\xi d\eta \quad (20) \end{aligned}$$

となる。2行目から3行目は、 ϕ の積分を実行しただけである (2π をかけるだけ)。ここで、次の不定積分の公式を用いる。

$$\int x^n e^{ax} dx = \frac{x^n e^{ax}}{a} - \frac{n}{a} \int x^{n-1} e^{ax} dx \quad (21)$$

$$\int x e^{ax} dx = \frac{e^{ax}}{a^2} (ax - 1) \quad (22)$$

これを利用すると、

$$\begin{aligned} &\int_1^\infty \int_{-1}^1 e^{-R\xi} \xi^2 d\xi d\eta \\ &= 2 \int_1^\infty e^{-R\xi} \xi^2 d\xi \\ &= 2 \left(\left[\frac{\xi^2 e^{-R\xi}}{-R} \right]_1^\infty - \frac{2}{-R} \int_1^\infty \xi e^{-R\xi} d\xi \right) \\ &= 2 \left(\frac{e^{-R}}{R} + \frac{2}{R} \left[\frac{e^{-R\xi}}{R^2} (-R\xi - 1) \right]_1^\infty \right) \\ &= \left(\frac{2}{R} + \frac{4}{R^2} + \frac{4}{R^3} \right) e^{-R} \quad (23) \end{aligned}$$

また、

$$\begin{aligned} &\int_1^\infty \int_{-1}^1 e^{-R\xi} \eta^2 d\xi d\eta \\ &= \frac{2}{3} \int_1^\infty e^{-R\xi} \eta^2 d\xi \\ &= \frac{2}{3R} e^{-R} \quad (24) \end{aligned}$$

となる。したがって、

$$\begin{aligned} S &= \frac{R^3 e^{-R}}{4} \left(\frac{2}{R} + \frac{4}{R^2} + \frac{4}{R^3} - \frac{2}{3R} \right) \\ &= e^{-R} \left(1 + R + \frac{R^2}{3} \right) \quad (25) \end{aligned}$$

となる。

次に(10.38)式の J は、 $r_{A_1} = R(\xi + \eta)/2, r_{B_1} = R(\xi - \eta)/2$ として、電子1,2の座標の積分を分けてやれば、

$$\begin{aligned} J &= \langle \phi_B(2) | \phi_B(2) \rangle \langle \phi_A(1) | -\frac{1}{r_{B_1}} | \phi_A(1) \rangle \\ &= \int \frac{1}{\pi} e^{-2r_{A_1}} \left(-\frac{1}{r_{B_1}} \right) d\vec{r}_1 \\ &= \int \frac{1}{\pi} e^{-R(\xi+\eta)} \left(-\frac{2}{R(\xi-\eta)} \right) (R/2)^3 (\xi^2 - \eta^2) d\xi d\eta d\phi \\ &= -\frac{R^2}{2} \int_1^\infty \int_{-1}^1 e^{-R(\xi+\eta)} (\xi + \eta) d\xi d\eta \quad (26) \end{aligned}$$

となる。ここで、(21)式、(22)式の積分公式を使えば、

$$\begin{aligned} &\int_1^\infty \int_{-1}^1 \xi e^{-R(\xi+\eta)} d\xi d\eta \\ &= \int_1^\infty \xi e^{-R\xi} d\xi \int_{-1}^1 e^{-R\eta} d\eta \\ &= \frac{1}{R^3} (R+1) (1 - e^{-2R}) \quad (27) \end{aligned}$$

となる。同様に

$$\begin{aligned} &\int_1^\infty \int_{-1}^1 \eta e^{-(\xi+\eta)} d\xi d\eta \\ &= \frac{1}{R^3} (1 - e^{-2R} - R(1 + e^{-2R})) \quad (28) \end{aligned}$$

である。よって、

$$J = -\frac{1}{R} + e^{-2R} \left(1 + \frac{1}{R} \right) \quad (29)$$

となる。

(10.43)式の K も J と同様である。

さらに、 J' は r_{12} の項があるが、例えば電子1,2および核Bについて、 $\xi = (r_{B_2} + r_{12})/r_{B_1}, \eta = (r_{B_2} - r_{12})/r_{B_1}$ などと置き換えると、計算が可能になる。 K' はかなり難しいので、興味のある人は参考書等を見てチャレンジして下さい。